

サワラの電気釣りに取り組んで  
～漁業環境の変化に合わせた水揚げ向上への挑戦！～

新潟漁業協同組合  
富樫 和幸

1. 地域の概要

私の住んでいる村上市は新潟県北部に位置し（図1）、人口7万人の街である。村上市は50kmにもおよぶ海岸線を有し、日本海の荒波に侵食された洞窟や、奇岩が絵巻物のように続く国の名勝天然記念物「笹川流れ」がある。一方、山には広大なブナの原生林が残され、川には晩秋から初冬にかけてたくさんのサケが群れをなして帰るなど、海・川・山が一体となった自然環境に恵まれた地域となっている。

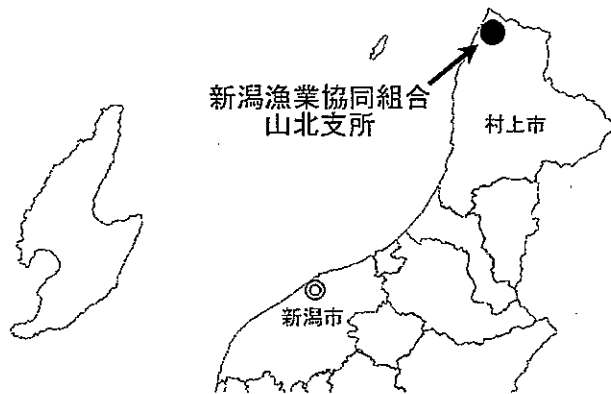


図1 新潟漁協山北支所の位置図

2. 漁業の概要

私が所属する新潟漁業協同組合山北支所の平成20年末における組合員数は、210名（うち正組合員147名、准組合員63名）である。新潟県の北部海域には広い大陸棚があるため、山北支所の主な漁業種類は、底びき網、板びき網、定置網となっている。平成20年の水揚げ量は1,769トンで、マダラ、イワガキ、サケ、アンコウなどが多く水揚げされている。

3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

私は、夏にはイカ釣りを、秋から冬にかけては一本釣りと板びき網漁業を行っている。秋口に板びき網で獲れた魚の価格は下がり安く、水揚げ金額が不安定であった。さらに、大型クラゲの大量出現によって、近年、板びき網の操業が困難になることがあった。

一方、平成11年以前には、新潟県北部海域でサワラが漁獲されるのはごくわずかで、サワラを目的とした釣り漁業はほとんど行われていなかった。しかし、平成12年以降、サワラが漁獲されるようになった（図2）。サワラの価格は、秋に漁獲される魚の中では比較的高く、安定していた。また、一本釣りは、大型クラゲが大量に出現しても、操業が可能であった。

このような漁場の変化を目の当たりにして、まわりの漁業者の方々がサワラ釣りを行って見てはと、声をかけていただいた。私も、サワラに適した釣り漁法が確立されれば、水揚げが増えるのではと考えるようになり、平成17年からサワラ釣りに取り組んだ。

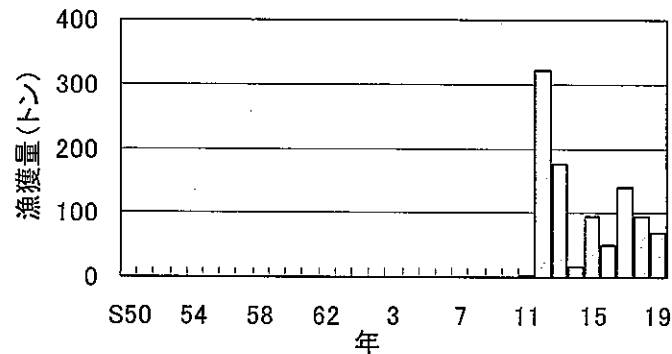


図2 新潟県北部海域におけるサワラの漁獲量の推移

#### 4. 研究・実践活動状況及び効果

サワラの電気釣りの仕掛けは、従来使用していたイナダ釣りの仕掛けを基に、サワラの習性を考えながら、独自に改良を行った。

釣りは、胴突き仕掛けで行い(図3)、針はタラ針を用いた。サワラの歯は鋭いため、枝糸が切られたり、光るものに対して興味を示すと考えられた。そこで、3cmくらいの長さに切った蛍光ゴム管を針の根元に付け、光りが少ない茶色の”よりとり”を用いた。

餌には、全長15cm程度のカタクチイワシを使った。漁の前に、冷凍ブロックになったカタクチイワシを解凍し、身持ちを良くするために塩をふった。針には、頭掛けで付け(図3)、電動リールをつけたブリ釣り用の竿を主に使った。

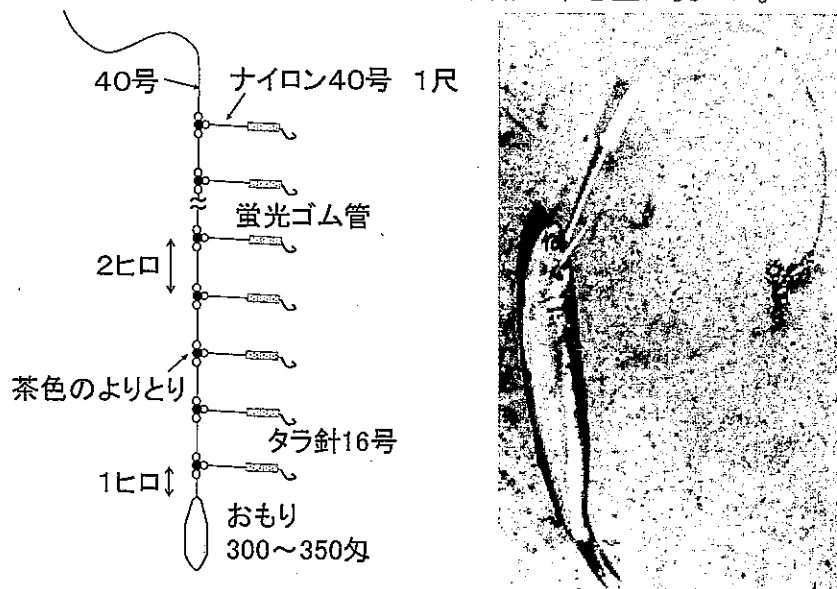


図3 仕掛けの概要

漁期は9月から10月で、漁へは昼過ぎに出港し、18時くらいから翌朝の5時まで父親と二人で漁を行った。漁場は、山北沖合に造成された高層魚礁や天然礁の周りで、魚影が濃ければ平場でも釣りを行った。漁は、イカ釣り用の電灯を30~40灯と、船縁から海に沈めた水中灯3灯を照らしながら行ったが(図4)、1トン未満の船では、数十キロの電灯で釣りをしている漁業者もいた。漁獲されたサワラは、鮮度の高い状態が維持されるように、素早く水氷の中に入れ、保存した。

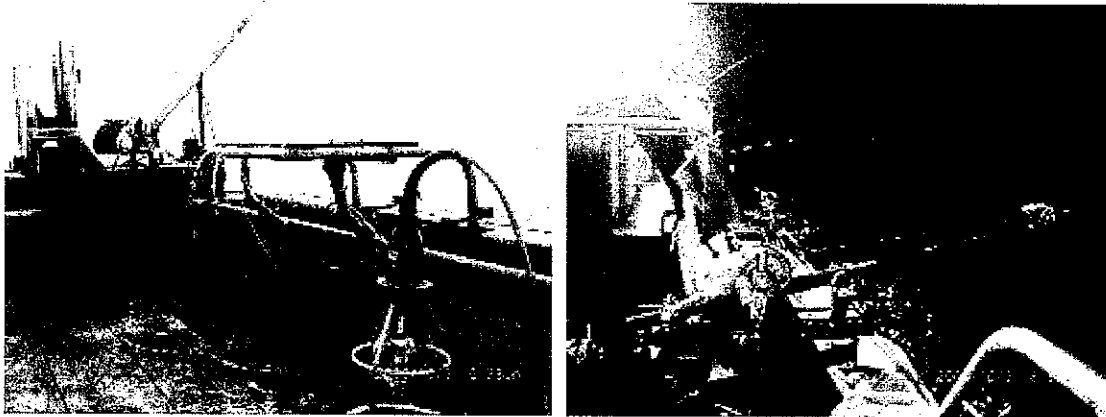


図4 サワラの電気釣りに用いる水中灯と漁風景

### 5. 波及効果

サワラ釣りを始めた当初から比較的多くの水揚げがあり、一日に300尾を漁獲することもあったが、単価が安定せず、値段が安くなることもあった。しかし、漁を続けるうちに値段が安定するようになり、平成20年9月、10月の2ヵ月で6.7トンのサワラを私の船で漁獲し、水揚げ金額は490万円となった。

山北支所でもサワラ釣りに取り組む漁業者が13名に増加し、平成20年9月、10月で見ると釣り漁業の水揚げ量の76.3%がサワラとなった。これらの状況を反映し、取り組み開始時では16.2トンであった釣り漁業におけるサワラの水揚げ量が、平成20年には取り組み開始時の1.8倍にあたる30.5トンとなった(図5)。

価格については、平成20年の釣り以外の方法で漁獲されたサワラの魚価が205円/キロであったのに対し、釣りでは663円/キロであった(図5)。平成17年に比べて

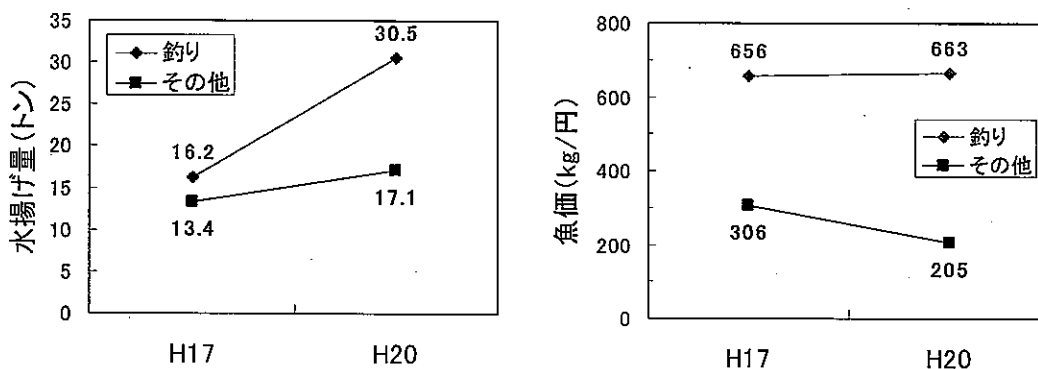


図5 新潟漁協山北支所におけるサワラの水揚げ量および魚価

水揚げ量が増えたにもかかわらず、サワラの魚価は比較的高く安定していた。これは、釣りでは、他の漁法より体サイズの大きな個体が漁獲されるためだと考えられた。

釣り漁業での水揚げ状況をみると、サワラ釣りの漁期である9月、10月における水揚げ量や水揚げ金額も増加する傾向にあり（図6）、平成20年の水揚げ金額は、平成17年の1.6倍の2,306万円となった。さらに、山北支所でのサワラの水揚げ量も増加傾向で、平成20年におけるサワラの水揚げ量は48.6トン（魚種別順位：13位）、水揚げ金額は2,510万円（魚種別順位：12位）になった（図7）。

取り組み以降の水揚げ量や水揚げ金額の増加から、サワラの電気釣りは、大型クラゲの大量出現の被害があり、魚価が不安定な秋口において、新たな漁業収入源を確保できる方法であることが明らかになった。そして、サワラ電気釣りの取り組みが支所の釣り漁業の変化を促し、支所全体の水揚げの増加に繋がったと考えられた。

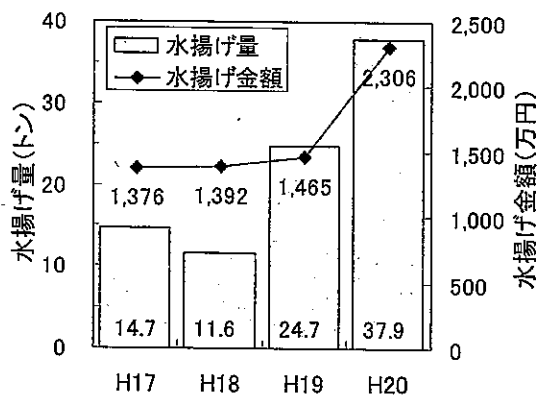


図6 9月、10月の釣り漁業における水揚げ量と水揚げ金額

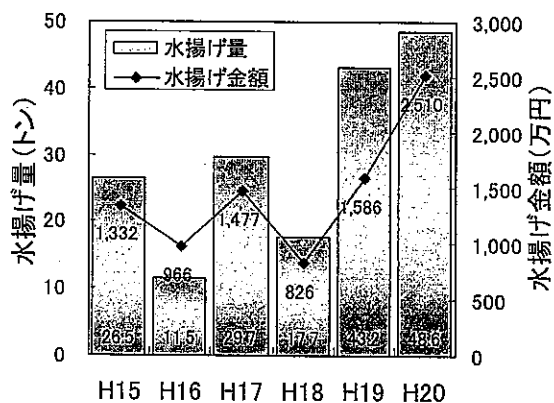


図7 山北支所におけるサワラの水揚げ量と水揚げ金額の経年比較

## 6. 今後の課題や計画と問題点

サワラの資源状況など、漁業環境の変化をきっかけにサワラの電気釣りに取り組んだ。魚の性質を踏まえて仕掛けを改良し、新たに造成された高層魚礁を漁場として利用するなどの結果、取り組み前の予想どおりの成果が得られた。

その一方、サワラの電気釣りでは、サメも釣れてしまい、操業に支障をきたすことが度々あった。また、最近では、電灯を灯さなくてもサワラが釣れる場合や、高層魚礁近く以外の場所でも漁獲されることがわかってきた。従って、サメが釣れなくなるような漁具漁法の改良や、サワラがいる漁場を素早く見極める方法が必要だと思った。

さらに、小型のサワラの価格が安いことから、小型サワラの料理や加工の方法の開発し、小型サワラの価値を上げることや、鮮度の良い山北釣りサワラの知名度の向上も必要であると考えられた。

これらの課題を解決するための取り組みも今後も続け、更なる水揚げの向上を目指していきたいと思った。